

国立国語研究所学術情報リポジトリ

“Situated Tellings” in Everyday Conversation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 臼田, 泰如, Usuda, Yasuyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003746

日常会話における「状況づけられた語り」

白田 泰如 (国立国語研究所研究系) *

“Situated Tellings” in Everyday Conversation

Yasuyuki Usuda (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

日常生活において、目の前で起こった出来事と結びつける形で、過去に自分が経験した事柄について語るということがなされる。本研究ではこの種の語りを「状況づけられた語り situated telling」と呼ぶこととし、以下の2点について検討する。1. この種の語りによって何がなされているのか。2. 具体的にどのような方法によって、語られる経験と目の前の出来事とが結びつけられているのか。この問題を検討するため、『日本語日常会話コーパス』からいくつかの会話断片を選び出して分析する。状況づけられた語りは、目の前で起こった出来事と類似の経験を有していることを示す。このことは、目の前で起こった一回限りの出来事を、何らかのパターンに基づいて「繰り返し起こること」として再編し、理解可能にしている。それにより目の前で起こった出来事を「繰り返し起こること」として理解することを主張するものであるといえる。そのために状況づけられた語りは、過去に経験された出来事の構成要素が目の前の出来事理解に即した形で組み立てられる。またそのことによって目の前の出来事が経験の語りによって理解可能になるといえ、相互反映的な関係が見出される。

1. はじめに

日常生活において、我々はしばしば、そのとき目についた物事、経験した出来事にいわば呼び起こされるような形でトピックを見出し、語りを開始するという事態に遭遇する。例えばデータ1の3行目から始まるIC01の語りは、その直前に起こった出来事(断片外)に関連する形でなされている。詳細は4において述べるが、この断片はレストランでの食事場面のものであり、3行目からの語りはIC01が「大好きでよく行く」という「ベルギービールの店」における「新入社員」の話だが、それはこの断片の会話がなされたレストランの店員のふるまい(についての参加者の理解)に関連づけられる形でなされている。

本稿では、このようにその場の状況に関連してなされる語りを「状況づけられた語り」と呼び、状況と結びつけて語ることで参加者は何をしようとしているのか、どのような仕方で状況と語りを結びつけているのか、について考える。また、その場の物事や出来事に関連づけて語りを行うことと、他の参加者が語った内容に結びつけて語りを行うこととの並行性を指摘し、その場の物事や出来事、あるいは先行する語りに対して、当該の語りがあるように位置付けられており、それがどのように観察可能になっているか、について述べる。

* usuda@ninjal.ac.jp

- データ 1 [会話 ID: S002_007 1965.261 秒-2008.600 秒]
- 1 IC05 あん [まりわかんない [って [ね:(言いますよね:)].
- 2 IC02 ([あ [::].
- 3 IC01 [でも [でも この [前: 俺 池袋で (.)
- 4 IC04 [ね: 最近 だって みんな飲まない
- 5 IC01 [え あの ベルギービールの店があるんですよ。 =
- 6 IC04 [ってゆうじゃないっすか。
- 7 IC03 =へ [::.
- 8 IC01 [で:もう大好きでよく行くんだけども そこも四月に新入社員が入った
- 9 らしく [て
- 10 IC03 [うん
- (0.5)
- 11 IC01 初めてなもんで すいません (0.4) [えっと:ってゆって。
- 12 IC03 [huhhuhuhu
- (0.3)
- 13 IC01 あの それって でも 普通の栓抜きのやつだから (0.2) 開けるだけなのね。
- 14 IC03 うん。
- 15 IC01 で そのあと
- (.)
- 16 IC04 あ ほんと かけたら お [いしいっすよ。
- 17 IC01 [三人で m [ビックボ [トルを割るから [ついでく。
- 18 IC02 [え?
- 19 IC04 [か- 辛いのお [いしいっすよ。
- 20 IC03 [あ::[::.
- 21 IC02 [辛いのお [おいしい。
- (.)
- 22 IC03 うん。
- (0.3)
- 23 IC01 もうね (.) あの 一人目 泡だけ。
- 24 IC03 aha[hahahaha
- 25 IC01 [hehe
- 26 IC04 [ん でも ちょっと薄いです。
- 27 IC01 [で 二人目がすっげえうまうまっってて (.) [三人目は (0.2) なん (でか) 知らない (けど
- 28 IC02 [なら これ。
- 29 IC01 すごい) 底のほうに溜まった澱だけってゆう (.) すごい面白い状況になって。
- 30 (.) 申し訳ございませんって言われても申し訳ございませんじゃねえだろうこれ
- 31 って思ったもん。
- (0.4)
- 32 IC03 hhha[hahaha
- 33 IC01 [とゆうのは あった。
- 34 IC03 .h [hh
- 35 IC02 [ん?
- 36 IC05 [ね: ちょっとというか。
- 37 IC03 [え 一番おいしいやつ 飲みたいですよ?

2. 背景

2.1 会話における語り

語り手が過去に遭遇した出来事を、時系列的に順を追って話すことは「物語 (storytelling, Jefferson 1978, Mandelbaum 2012)」と呼ばれる。また、具体的な過去の出来事を時系列に沿って話すことに限らず、嗜好、主張、不満といったことならについて、複数の発話を費やして話すことを「語り (telling, Jefferson and Lee 1992)」と呼ぶ。いずれの場合においても、ある参加者が語りを成功裏に開始した場合、語りの途中で発話の権利が相手に移行することが適切な位置が生じたとしても、まだ語りが終わりそうにない場合、一般に発話権は移行せず、語りを聞いている参加者は最小限の応答を返すにとどまることが知られている (Jefferson 1978, Mandelbaum 2012, Schegloff 2007)。つまり語りの発話連鎖においては、通常のターン交代システムが停止される。そのことは会話において、語りが際立った連鎖環境であることを特徴づける。

2.2 第二の物語

Another way in which recipients indicate what they are making of a storytelling is by telling a "second" story (Ryave, 1978; Sacks, 1992: I: 764-72, II: 3-17, 249-68). These stories are built to show that they are touched off by and / or are picking up the point of the story to which they are responding (Sacks, 1992: I: 767-8). Sacks also noted that second stories are not just "touched off by," but are carefully fitted to and specifically "stand as analysis of" the prior (771).

(Sidnell and Stivers 2012:505)

第二の物語 (second story, Sacks 1992) とは上記の引用において述べられているように、先行する物語に触発される形で開始される語りを指す (Sacks 1992, Mandelbaum 2012)。先行する物語に対して類似の経験による第二の物語を語ることは、それまで聴き手であった参加者が、それまでの語り手が語った経験について理解したことを、単に主張するのではなく立証することができることとされる (Sacks 1992)。

2.3 本研究における議論との接続

既に語られた話に対して第二の物語によって応接することには、必然的にその先行する物語をどのような態度をもって捉えたかということが問題になる。従って第二の物語をめぐっては、Sacks (1992) で論じられるような第一の物語の理解の問題に加えて、成員性や共感の問題が論じられてきた。例えば、語られた経験に対して類似の経験を語ることにより、第二の物語の語り手は第一の物語の語り手と「共-成員 co-member」であること、すなわち同じカテゴリーに属する成員であることが立証され (串田 2001, 2005, 戸江 2018)、語られた事柄に対して共感的であることを示すこととなる (Ruusuvuori 2007, 安井 2012)。

一方、4 において見るように、物語ではなく出来事に応接して語られる物語は、その出来事がどのような物語と規範を同じくするものとして理解可能であるかが表出されることとなる。

同時に、態度が問題にならないわけではなく、出来事そのものではなく、その出来事がどのように扱われているのかに対しての態度が表出される。「第二の物語」の第一の物語との結びつきと、出来事とそれに対する語りとの結びつきには5において触れる。

3. データと方法論

本研究で扱うデータは、国立国語研究所より2022年3月に公開された『日本語日常会話コーパス(CEJC)』(Koiso ほか)である。CEJCは日常生活における会話の多様性をできるだけ反映し、さまざまな研究に利用可能な形で提供するため、音声および映像と文字起こしテキストを利用可能な形で提供するほか、以下のような特徴を備えるよう設計されている。

- **大規模**：200時間分の会話データ
- **代表性**：年齢・性別・属性・会話の種類 of 均衡性を考慮
- **検索性**：形態論情報(品詞、文中の位置、発話時間など)

上記の自然会話データについて、会話分析(conversation analysis, Sacks et al. 1974, Schegloff 2007)の方法論にもとづく分析を行う。会話分析とは、「人が日常生活の中で従事する多種多様な実践的諸活動——会話、会議、診察、面接、ゲーム、授業、接客等々——を構成する出来事や人びとの振る舞いが、いかにしてその場で常識的に合理的な理解可能性を備えるものとして成立しているか、この秩序を産出するための社会成員の「方法」(Garfinkel 1967)を、発話をはじめとする相互行為中の振る舞いの観察を通じて明らかにする」方法論である(平本 2018)。我々はやりとりを行いながら日常のさまざまな活動を行なっている。そうした活動の中のやりとりに用いられることばや身振りなどのふるまいは、すべてがそうではないにせよ、その活動を構成するひとつひとつの行為や活動全体を成り立たせるための参加者の指し手になっているものを含んでいる。会話分析が採用する分析方針は、どのようにしてそうしたふるまいが行為を構成する指し手になっているのかを明らかにすることである。

4. 分析

再度、1のデータ1を見られたい。この断片では仕事に関連する知り合い同士が5人で、レストランで食事をしている。断片に先行する部分で、熟練していない店員がワインの開栓に失敗しており、その次にワインを注文した際には件の店員は「こちらで開け」る(バックヤードで開けてくる)ことを申し出て、テーブルを離れる。それからしばらく件の店員のありうる失敗についての冗談を言い合う(「ばらっばらになった瓶を持ってきたら笑うよね」など)。断片はその直後からのものであり、1行目は、件の店員が飲酒の習慣をもたないためにワインの開栓のことが「わかんない」のだろうと述べているものである。なお、断片の会話において、IC01、IC03、IC05とIC02、IC04がそれぞれ分裂状態にあり、3行目から開始されているIC01の語りの聴き手になっているのはIC03とIC05である。

3行目の語りの開始部には「でも」が前置されており、直前の見解となんらかの形で逆接・対比的な内容が開始されることが予示されている。これに続いて「ベルギービールの店(5行目)」およびその「新入社員8行目」はいずれも、参加者が直前までに経験した出来事に沿うように物語を組み立てるために提示されているといえる。11行目において再現されている「新

入社員」の発話も同様に、店員の不慣れさを例示することで、直前の出来事と語られている経験が類似していることが例証されている。一方、続く13行目では、IC01の経験においては開栓には特段の技能を要さないことが、「でも」を伴って示されており、類似しない部分が明確にされている。続く15行目には「で」が前置され、その後の17行目から物語の中心的内容にさしかかることが予示される。23行目は laughable(Glenn 2003) として提示されていることは、23行目に対する反応である24行目からも見て取れる。一方、27行目および29行目には直後に明瞭な反応が生じておらず、31行目のあとで再び笑いが生じている(32行目)。

まず、この断片に先行する時点で話題にされている、参加者が会話時点で食事をしているレストランの店員のふるまいは、まさに話題にされているそのことにより、ある程度際立って特異なものとして扱われていると言える。3行目の「でも」は、まずその先行する文脈に対して、続く語りが対比的な位置づけにあることを示している。すなわち、その出来事が他に類を見ないほどの特異なものなのではなく、類例を自身の経験の中から見つけて語るができるくらいにはよくあることだという理解が示されている。そのように類似の経験を語ることによって、そのような理解の仕方を示すことができるのは、とりもなおさず我々が通常、出来事を理解するために用いている「ドキュメンタリー的方法 (documentary method of interpretation, Garfinkel 1967)」との並行性による。ドキュメンタリー的方法とは端的に以下のように説明される。

解釈のドキュメンタリー的方法とは、なにか特別な方法のことを指すのではなく、人々がものごとを理解するために日常的に行っている実践であり、現実には発生する発話や活動を、その背後に想定される規範のドキュメント (その規範についての 資料・事例) として取り扱い、規範と結びつけて解釈していく実践を指す。

(前田ほか 2007)

上の説明からもわかるように、我々は日々、原理的に一回限りの出来事に繰り返し遭遇する上で、それらをすべて互いにどれとも似ていない通約不可能なことがらとして扱っているということではなく、なんらかの仕方で類型にまとめて理解している。類似の経験を語るにより、目の前の出来事が、語られた経験と同種のものとして、ある累計のもとにまとめて理解できるものとして再構成しているといえる。33行目は、そのように目の前の出来事をあてはめることのできる類型の候補として、先行する経験の語りを行ったことを説明しているとみることができる。

このとき、注目に値するのは31行目における「もん」である。この「もん」はある種の理由を表す表現である。では、この「もん」が接続している30行目および31行目が何かの理由になっているのだろうか。そうだとすると、考えられるのは、語られた経験を通じて30行目および31行目のように「思った」ことがあるために、類似した目の前の出来事も、その類型のうちに理解することのできるものであるということを主張しているのではないだろうか。ただし、ここに理由を表す「もん」という語彙が配置されていることにより、語り自体がそのような主張をするための理由を提示するものになっているのかどうかは現時点では断定できない。

5. 考察

4で論じた現象と類似したものとして、「第二の物語」を語る事例を見てみたい。データ2は、2人の男性が職場(IC01の主宰する個人学習塾)で、業務外の雑談をしている場面である。断片の直前では、IC01の知人のフィリピン出身の人物の弟が、仕事をせず家にいて家族の女性の収入に頼って暮らしており、そのような「ハウスハズバンド」が「海外」ではある程度社会的に認知されているという話がされている。3行目は、そうしたライフスタイルは日本では受け入れられていない、という趣旨で開始される「第二の物語」である。

データ2 [会話 ID: T018_004 943.395 秒-944.063 秒]

- 1 IC02 (な [かなか] うーん。
- 2 IC01 [そっか:。
(0.5)
- 3 IC02 でも 日本では (なかなか) その制度 (.)
- 4 あの (0.3) (え) (0.4) 女性を働か () の うちの保育士の 母 保母ですけど:
(0.5)
- 5 あの: なんか昔テレビで: (0.6) 女性がけん- あの 研究職で: 男性がトヨタの (0.5)
- 6 あの: なんだっけ 技術職の人がいて: 結婚した時 女性がもう 研究職とですげえ
- 7 大成し (そう) だから: 男性が トヨタ辞めちゃったって話しがあつたんすけ [ど:。
- 8 IC01 [うん。
- 9 IC02 (0.3) うちの親 それすっげえ否定してましたからね 男性が (働か) ないとおかしいっ
て。
(0.5)
- 10 IC01 だ それ 理由 でも 理由はないじゃん 別にさ [なんとなく感覚でしょ?
- 11 IC02 [はい 感 [覚で
- 12 IC01 [うん。
- 13 IC02 そう (反対) してるんす [けど:
- 14 IC01 [だって別に:
- 15 IC02 はい。

2.2において述べたように、第二の物語は、先に語られた事柄を、自分も似た経験があるということを示して理解を立証するものである。従って、第二の物語は先行する語りを第二の物語の語り手がどのように理解したかが示されることになる。データ2は、IC01が先に語ったフィリピン人の知人の話に対して、自らの母親の話語ることで、自らの経験の範囲での先の話と理解する上での規範を共有するであろう物語を取り出して語ったものだと考えることができる。従って、ここでの第二の物語も、先行する事柄に対して自らの経験を語ることで、それをどのように理解したかを表出し、ある規範のもとに理解可能な事例としてそれらを並列する手続きになっているといえる。

ここにデータ1のような状況づけられた語りとデータ2のような第二の物語との並行性を指摘することができる。既に述べたように、どちらも先行する事柄をどのように理解したかを、自らの経験を語るという仕方では表出する方法である。また、データ1において行われていたのは、出来事から事象をピックアップして再構成し、それに沿う形で経験を物語として構築す

ることであった。これは既に第二の物語において指摘されている、単に似た話を語るのではなくて、第一の物語の詳細な分析に基づいて第二の物語が構築されるということと並行的である (Sacks 1992)。

加えて、4 では、データ 1 では単に共通の規範に基づいて理解可能な事例が表出されているのみならず、その規範のもとに先行することがらが理解可能であることが主張されていることの傍証として、語りの末尾に現れる「もん」に着目した。同様の理由を表す表現である「から」が、同様にデータ 2 の 9 行目にも現れている。この「から」も同様に、語られた事柄のような事例があることを理由に、先行する事柄がそれと並行的に理解可能であるということをも主張するものであるように聞くことができる。

6. おわりに

本研究では、直前に起こった出来事に関連して、それと類似の経験を語ることを「状況づけられた語り」と呼び、以下のことを指摘した。状況づけられた語りは、目の前の出来事が語り手の経験した別の出来事と同じ規範に基づいて理解可能であることを主張するものである。この、同じ規範に基づいて出来事を理解するという手続きは「ドキュメンタリー的方法」という、人々が日頃普通に行っている方法が可視的になされているものであるといえる。またそのような主張がなされていることの傍証として、しばしば状況づけられた語りにおいて、その経験を根拠として出来事を理解しようとする表現が出現することが指摘できる。

本文中で用いた転記記号

本文中で会話の転記に用いた記号を表 1 に示す。これらの記号は西阪 (2008) に拠る。

表 1 転記記号一覧

[発話の重なる開始 (重なるの終了が] によって示されることもある)
:	直前の音が引き伸ばされている
=	発話末と次の発話頭に付され、その二つの部分が隙間なくつながっている
-	直前の語が途切れている
?	発話末が上がる音調
(発話)	不明瞭な発話
(.)	おおむね 0.2 秒に満たないわずかな間
(数字)	おおむね括弧内の数字の秒数の間が空いている
> 発話 <	記号に挟まれた発話の部分が相対的に速く発話されている
< 発話 >	記号に挟まれた発話の部分が相対的に遅く発話されている
h	呼気音 (聞き取りに応じて他の子音が用いられることもある)
.h	吸気音

謝 辞

本研究は、国立国語研究所のプロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー・小磯花絵) による成果に基づいて行われた。また日本学術振興会科学研究費交付金若手研究「日常会話コーパスを用いた「課題」に基づく会話の分析：定

量・定性の両面から」(研究代表者:白田泰如, 課題番号 20K13019) の助成を受けて行われた。

文 献

- Gail Jefferson (1978). "Sequential Aspects of Story Telling in Conversation." Jim Schenkein (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. New York: Academic Press., Chap. 9 pp. 213–248.
- Jenny Mandelbaum (2012). "Storytelling in Conversation." Jack Sidnell, and Tanya Stivers (Eds.), *The Handbook of Conversation Analysis*. West Sussex: Wiley-Blackwell., Chap. 24 pp. 492–507.
- Gail Jefferson, and John R. E. Lee (1992). "The Rejection of advice: Managing the problematic convergence of a 'troubles-telling' and a 'service encounter'." Paul Drew, and John Heritage (Eds.), *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 521–548.
- Emanuel A. Schegloff (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jack Sidnell, and Tanya Stivers (Eds.) (2012). *The Handbook of Conversation Analysis*. West Sussex: Wiley-Blackwell.
- Harvey Sacks (1992). *Lectures on Conversation Volume 1 & 2*. New Jersey: Wiley-Blackwell.
- 串田秀也 (2001). 「私は - 私は連鎖: 経験の『分かち合い』と共 - 成員性の可視化」 社会学評論:2, pp. 36–54.
- 串田秀也 (2005). 「会話における参加の組織化の研究: 日本語会話における「話し手」と「共 - 成員性」の産出手続き」 博士論文 (未公刊), 京都大学大学院人間・環境学研究科.
- 戸江哲理 (2018). 『和みを紡ぐ: 子育てひろばの会話分析』 勁草書房, 東京.
- Johanna Ruusuvuori (2007). "Managing affect: integration of empathy and problem-solving in health care encounters." *Discourse Studies*, 9:5, pp. 597–622.
- 安井永子 (2012). 「接続詞「でも」の会話分析研究: 悩みの語りに対する理解・共感の提示において (高橋亨教授退職記念)」 名古屋大学文学部研究論集, 58, pp. 89–102.
- Hanae Koiso・Haruka Amatani・Yasuharu Den・Yuriko Iseki・Yuichi Ishimoto・Wakako Kashino・Yoshiko Kawabata・Ken'ya Nishikawa・Yayoi Tanaka・Yasuyuki Usuda・Yuka Watanabe "Design and Evaluation of the Corpus of Everyday Japanese Conversation." *Proceedings of the 13th Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2022)*, pp. 5587.
- Harvey Sacks, Emanuel A. Schegloff, and Gail Jefferson (1974). "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation." *Language*, 50:4, pp. 696–735.
- Harold Garfinkel (1967). *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall Inc.
- 平本毅 (2018). 「会話分析の広がり」 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実 (編)

『会話分析の広がり』 ひつじ書房, 東京 pp. 1-33.

Phillip Glenn (2003). *Laughter in Interaction. Studies in Interactional Sociolinguistics*.
New York: Cambridge University Press.

前田泰樹・水川喜文・岡田光弘 (編) (2007). 『エスノメソドロロジー：人びとの実践から学ぶ』
ワードマップ 新曜社, 東京.

西阪仰 (2008). 『分散する身体：エスノメソドロロジー的相互行為分析の展開』 勁草書房, 東京.

関連 URL

『日本語日常会話コーパス』 <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html>